

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530801

研究課題名(和文) 逸脱的消費者行動における実証的研究：特に溜め込み行為の心理的メカニズムに注目して

研究課題名(英文) An empirical study of deviant consumer behavior: Focusing on the psychological mechanism of hoarding

研究代表者

池内 裕美 (IKEUCHI, Hiromi)

関西大学・社会学部・教授

研究者番号：50368198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ホーディングを「何らかの主観的な意味を付与しているために、モノを溜め込み、処分できない性向」と定義した。そして、非臨床群を対象としたホーディング傾向尺度を作成し、その規定因やホーディングがもたらす諸問題の検討などを試みた。主な成果は、以下の通りである。1)6つの下位尺度(24項目)からなるホーディング傾向尺度が作成された。2)規定因の一つとしてアニミズムに注目したところ、アニミズム的思考はホーディング傾向を有意に高めることが見出された。3)ホーディング傾向、すなわちモノに対する特別な執着が物質多量を招き、それが精神的、経済的、社会的問題をもたらすことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：In this study, a hoarding tendency is considered as a common behavior and is defined as “the trait that many possessions were saved and couldn't be discarded because of having certain subjective meanings.” One of the main purposes of this study is to develop the Hoarding Tendency Scale for non-clinical individuals. The further purpose is to investigate the determinants of hoarding and the problems that hoarding cause with that scale. The main findings are as follows: 1) The Hoarding Tendency Scale consisting of six factors (24 items) was developed. 2) This study focused on animistic thinking as one of the determinants of hoarding. The results of the ANOVA indicated that animistic thinking significantly promoted a hoarding tendency. 3) The results of covariance structure analysis suggested that excessive attachment to possessions caused an excessive build-up of items in the home, and that excessive build-up caused future mental problems, economical problems, and social problems.

研究分野：社会心理学、消費心理学

キーワード：逸脱的消費者行動 ホーディング 溜め込み 強迫性購買 アニミズム 死蔵 擬人化 拡張自己

## 1. 研究開始当初の背景

「逸脱的消費者行動」(deviant consumer behavior)とは、「購買や消費(使用、所有)の結果が個人的、社会的に何らかの否定的結果をもたらす消費者行動のこと」をいう。具体的には、買物依存、溜め込み行為、常軌を逸した苦情行動、さらには窃盗や詐欺といった犯罪行為などが、その典型例として挙げられる。本研究では、こうした逸脱的消費者行動の中でも特に近年注目を浴びている「溜め込み行為」(ホーディング)に焦点を当てる。

「ホーディング」(hoarding)とは、臨床的には「他の人にとってほとんど価値がないと思われるモノを大量に溜め込み、処分できない行為」と定義されている(e.g., Frost & Gross, 1993)。これは、大量消費社会の行く末に、あるいは人間社会の希薄化・無縁化に伴うモノへの過剰な執着の末に、生じるべくして生じた問題といえる。しかし、その社会的関心の高まりに反し、学術的進展は極めて遅く、1990年代になってようやく欧米で診断基準や弊害などの著書や論文が紹介され始めた(e.g., Frost & Gross, 1993; Neziroglu, Bublick, & Yaryura-Tobias, 2004)。

一方、国内でも、ホーディングに関する学術的研究は非常に少なく、臨床心理学で多少の研究例はみられるものの、病的な「強迫的溜め込み」(compulsive hoarding)に限定されている。しかし Kingston (1999)によると、例えば衣類の場合、多くの人は日ごろ持ち服の20%しか着ておらず、溢れる死蔵品に囲まれて生活している様子が報告されている。つまり、こうしたモノがもたらす身近な諸問題は、誰にでも共通して起こり得る極めて身近な社会心理学的問題といえる。それにもかかわらず、社会心理学の分野では、対人関係に関する問題は積極的に取り組まれているが、いわば「対物関係」ともいえる、人とモノとの関係を取り上げた実証研究は、ほとんど等閑視されているのが現状である。

## 2. 研究の目的

上記のような背景を踏まえ、本研究では日常的なホーディングに関する基礎的データの蓄積を目指し、国内の実態分析から日米間の国際比較に至るまで、多面的な検討を試みる。本報告では紙面の都合上、その中の「ホーディング傾向尺度の作成」、「ホーディングの規定因の検討」、そして「ホーディングがもたらす心理的・社会的諸問題の検討」の3つの調査結果に焦点を当てて紹介する。

### (1) ホーディング傾向尺度の作成の試み：

本研究では、日常レベルで生じる身近なホーディングに焦点を当て、「何らかの主観的な意味を付与しているために、モノを溜め込み、処分できない性向」をホーディング傾向として規定する。そして、Frost, Steketee, & Grisham(2004)や Steketee, Frost, & Kyrios(2003)などの強迫的ホーディングに関する尺度項目を参考に、新たにより日常レベルのホー

ーディングを対象とした「ホーディング傾向尺度」の作成を第一の目的とする。その際、妥当性の検討においては、既に Frost, Kim, Morris, Bloss, Murray-Close, & Steketee(1998)によってホーディングとの強い関連性が確認されている「強迫性購買」、すなわち理性を失ったコントロール不能の購買傾向を外的基準として用いる。本尺度の開発により、非臨床群の中でも、特にホーディング傾向の強い人のモノに対する態度特性について明らかにすることが可能となる。

### (2) ホーディングの規定因の検討：

ホーディングの規定因については、これまで比較的多くの研究がなされており、例えば初期の頃は、ホーディングは「強迫性障害」(OCD)の一症状として捉えられてきた。他にも「強迫性パーソナリティ障害」(OCPD)、遺伝子疾患や脳気質疾患、特に脳の前頭葉前部の損傷(Frost & Steketee, 2010, 春日井訳, 2012)、何らかの精神疾患や認知症、さらには信念の歪みともいえるモノへの過剰な愛着との関連性などが挙げられる(Frost, Hartl, Christian, & Williams, 1995)。本研究では、その中で「アニミズム」(animism)に着目し、アニミズム的思考がホーディングに及ぼす影響について検討する。これは、Warren & Ostrom(1998)がモノを捨てられない理由の一つに、モノの人格化傾向を示唆していることによる。なお、ここではアニミズムを「実際に生を認めているわけではないが、無生物に対して神性や生命の存在を感じる現象」と規定する(池内, 2008)。そして「アニミズム的思考の強い人は弱い人に比べてホーディング傾向が強い」という仮説を立て、その検証を第二の目的とする。

### (3) 心理的・社会的諸問題の検討：

ホーディングが注目される理由の一つに、個人や社会にもたらす諸問題の大きさが挙げられる。例えば Neziroglu, *et al.* (2004)は、ホーディングの特徴の一つとして、モノが原因で困惑したり、落ち込んだりする点を挙げている。DSM-5のホーディングの診断基準においても、ホーディングは臨床的に重大な苦悩や機能的障害を引き起こす点が挙げられている(APA, 2013, 日本精神神経学会, 2014)。また Frost, Tolin, Steketee, Fitch, & Selbo-Bruns(2009)は、ホーダーの約65%が「強迫性購買」を、また約85%が「過剰取得」を併発しており、経済的な負債を負っていることを報告している。その他、ホーダーは人よりもモノと一緒にいる方が居心地良く感じるため、他者と深い関係を築こうとせず、引きこもりがちになるといった主張もあり、特に高齢者の場合は「社会的孤立」に陥りやすいことが報告されている(Steketee, Frost, & Kim, 2001)。そこで本研究では、ホーディングによる諸問題を精神的、経済的、社会的の三つの観点から整理し、ホーディング傾向との因果関係について検討することを第三の目的とする。

### 3. 研究の方法

本報告書では、主に3つの研究目的に焦点を当てて紹介するが、以下に目的ごとに用いた調査方法の概要を記す。

#### (1) ホーディング傾向尺度の作成の試み：

①調査概要：Ipsos 株式会社のインターネットパネルデータベース（全国で336万人登録）から、首都圏（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）と関西圏在住（大阪府、兵庫県、奈良県、京都府）の414名のモニターを性・年齢が大きく偏らないように層化抽出し、web調査を実施した。エディティング作業の結果、有効回答数は410名となった。

性別構成：男性160名、女性250名、  
平均年齢：41.78 ( $SD=12.87$ , 年齢幅20~69)

②調査時期：2012年10月上旬

③調査項目：(主な項目のみ抜粋)

#### a. ホーディング傾向尺度

既存尺度を基に、計52項目からなる予備項目群を作成し、「全くあてはまらない」(1点)～「非常に当てはまる」(5点)の5件法にて評定させる。

#### b. 強迫性購買尺度 (Compulsive Buying Scale)

Edwards(1993)の13項目からなる「強迫性購買尺度」を使用し、5件法にて評定を行った。なお当該尺度は、浪費性向(6項目)、購買感情、機能障害的浪費、購買後罪悪感(各2項目)の下位尺度で構成されている。

#### (2) ホーディングの規定因の検討：

①調査概要：Ipsos 株式会社のインターネットパネルデータベース（全国で336万人登録）から、首都圏と関西圏在住の234名のモニターを性・年齢が大きく偏らないように層化抽出し、web調査を実施した。

性別構成：男性93名、女性141名、  
平均年齢：42.10 ( $SD=13.15$ , 年齢幅20~69)

②調査時期：2012年12月中旬

③調査項目：(主な項目のみ抜粋)

#### a. ホーディングの実態に関する項目

捨てられずに溜め込んでいるモノの有無、溜め込んでいるモノの種類(自由記述)、なぜ捨てられないのか(自由記述)等

#### b. ホーディング傾向尺度

上記(1)の調査で最終的に作成された28項目に対し、5件法にて評定させる。

#### c. 成人版アニミズム尺度

本研究では、池内(2010)の作成した尺度を使用した。「自然物の神格化」「所有者の分身化」「所有者の擬人化」の3つの下位概念(11項目)で構成されており、5件法にて評定させる。

#### (3) 心理的・社会的諸問題の検討：

①調査概要：Ipsos 株式会社のインターネットパネルデータベースから、首都圏と関西圏在住の453名のモニターを抽出し、性・年齢が大きく偏らないように層化抽出し、web調査を実施した。

性別構成：男性184名、女性269名、  
平均年齢：45.75 ( $SD=13.75$ , 年齢幅20~69)

②調査時期：2013年8月下旬

③調査項目：(主な項目のみ抜粋)

#### a. ホーディング傾向尺度

上記(2)の調査を経て最終的に作成された24項目に対し、5件法にて評定させる。

#### b. ホーディングに因る諸問題の項目群

Frost, et al. (2009)等の既存研究や予備調査(グループインタビュー)の結果を基に項目群を作成。ワーディングを経て選定した9項目に対し、上記同様5件法にて評定させる。

### 4. 研究成果

研究成果においても、3つの研究目的ごとに主な結果のみを取り上げ、簡単に紹介する。

#### (1) ホーディング傾向尺度の作成の試み

①信頼性の検討：「ホーディング傾向尺度」の予備項目を構成する52項目を因子分析した結果(主因子法、プロマックス回転)、ホーダーのモノに対する態度特性として6因子が抽出された。各因子に高い因子負荷量を示した項目内容から、順に「物質多量因子」(8項目、 $\alpha=.955$ )、「処分回避因子」(6項目、 $\alpha=.891$ )、「拡張自己因子」(4項目、 $\alpha=.877$ )、「対物責任因子」(3項目、 $\alpha=.750$ )、「対物管理因子」(4項目、 $\alpha=.696$ )、「記憶補助因子」(3項目、 $\alpha=.698$ )と命名できる。最後の二つの因子の $\alpha$ 係数は若干低くなっているものの、全体的には十分な信頼性が得られたといえる。また、各因子の尺度項目得点については、順に $M=2.53$  ( $SD=.99$ )、 $M=3.12$  ( $SD=1.00$ )、 $M=2.31$  ( $SD=.74$ )、 $M=2.50$  ( $SD=.80$ )、 $M=3.40$  ( $SD=.79$ )、 $M=2.53$  ( $SD=.80$ )となった。診断のつかない非臨床群を対象としているために、全体的に低い値であるが、フロア効果を生じた項目はなかったので28項目をすべて尺度項目として用いることにした。

②妥当性の検討：「強迫性購買尺度」においては、既に信頼性と妥当性が報告されていることから、オリジナルの下位尺度に基づいて、尺度項目得点を算出した。そして、これら4因子とホーディング傾向尺度の6因子の尺度項目得点間で相関分析を行ったところ、対物管理と購買感情との関係を除く全ての変数間において、有意な正の相関が見いだされた( $r=.117\sim.399$ )。したがって本尺度は、基準関連妥当性においても十分な値が認められたといえる(項目の詳細はTable1を参照)。

#### (2) ホーディングの規定因の検討

①ホーディングの実態：捨てられずに溜め込んでいるモノがある人は184名(78.6%)、ない人は50名(21.4%)であり、約8割近い人が何らかの溜め込みをしていることが見いだされた。また、実際に溜め込んでいるモノの種類を尋ねたところ、「衣服・服飾品等」が全体の約40%と際立って多く、「紙袋・空き箱等」「本・雑誌・資料等」が同程度で続いていた。溜め込みの理由に関しては、「必要になるかもしれないから」が全体の約4分の1の24.6%を占め、続いて「もったいないから」(19.1%)、「思い出のモノだから」

(18.0%)の回答が多かった。

②**確認的因子分析結果**：研究(1)で作成された「ホーディング傾向尺度」の6因子構造を確認するため、確認的因子分析を実施した。GFI、AGFIともに、採用の基準とされる.90をやや下回っているため、本調査のデータは想定した因子構造に完全には適合していないといえる。標準化推定値をみると28項目中4項目は.45以下であり、他の項目の推定値が全て.50以上であるのに比べて若干低くなっていったため、これら4項目を省いて再度分析を行った。その結果、適合度指標は、GFI=.938、AGFI=.909、RMSEA=.001、AIC=376.0、 $\chi^2(237)=186.0$ 、 $p=.826$ となり、安定した因子構造が得られた。したがってTable1に記す24項目を最終的な尺度項目として提唱する。

Table1 ホーディング傾向尺度の項目一覧

<b>物質多量因子：大量のモノで生活環境に支障が生じている傾向</b>
私の家の各部屋は、大量の持ちモノが散乱しているために使いにくくなっている
家の中が大量の持ちモノで散らかっているために苦痛を感じている
家の中に大量の持ちモノが散乱しているため、仕事や日常生活が妨げられていると感じることがある
家の中が大量の持ちモノで散らかっているために、各部屋を本来の目的どおりに使用できなくなっている
私の生活スペースは、持ちモノで散らかっている
家の中が大量の持ちモノで散らかっているために、人が来るのを拒むことがある
家の中が大量の持ちモノで散らかっているために、歩きにくくなっている
あまりに持ちモノが散乱しすぎていて、もはや自分では管理できないと感じている
<b>処分回避因子：モノを捨てることに抵抗を感じる傾向</b>
使わないであろう持ちモノでも、とっておきたいと思う方だ
普通の人なら捨ててしまうようなモノでも、何かに備えてとっておく方だ
捨てた方がいいと思う持ちモノでも捨てられないことがある
私にとって持ちモノを捨てることは苦痛だ
<b>拡張自己因子：モノが自分の一部であると感じる傾向</b>
持ちモノを捨てることは、私の一部を捨てることと同じ
持ちモノを捨てることは、私の人生の一部をなくすことと同じ
持ちモノを捨てるということは、自分の一部を失うような感である
持ちモノをなくすことは、私にとって、友だちをなくすことと同じ
<b>対物責任因子：モノに対して所有者としての責任を感じる傾向</b>
私には自分の持ちモノを幸福にする責任があると思う
私には持ちモノの使い道を探す責任があると思う
<b>対物管理因子：自分のモノは自分自身で管理したいという傾向</b>
誰かに持ちモノの置き場所を勝手に変えられると、苛立ちを覚える
持ちモノがあるべき所がないと戸惑ってしまう
自分の持ちモノは自分だけで管理したい
<b>記憶補助因子：モノの存在を忘れないために、そのモノ自体を保持し続ける傾向</b>
もし持ちモノを捨てたとすると、私はそのモノについて何も思い出せないだろう
持ちモノを整理整頓してしまうと、私はそのモノの存在を完全に忘れてしまうだろう
私は記憶力が悪いので、身の回りに持ちモノをおいておかなければそのモノの存在を忘れてしまう

③**アニミズムとの関連性**：池内(2010)の「成人用アニミズム尺度」においては、信頼性(内的整合性)と基準関連妥当性が報告されていることから、オリジナルの因子に基づいて下位尺度得点を算出した。そして、これら3つの下位尺度得点を基に階層クラスタ分析を行った結果(平方ユークリッド距離によるWard法)、各クラスタの相対的距離と解釈可能性から、クラスタの結合距離10を境として3つのクラスタへの分類が妥当と判断した。クラスタごとにアニミズム尺度の各因子の下位尺度得点を算出したところTable2のような結果となった。また、これらクラスタを独立変数、上記の下位尺度得点を従属変数として一要因の分散分析を行ったところ、全ての分析においてクラスタの主効果が有意となった。そこでTukeyの多重比較を行ったところ、アニミズム尺度の各下位得点はクラスタ1(CL1) > クラスタ2(CL2) > クラスタ3(CL3)となることが認められた( $p < .05$ 、順にMSe=.25, MSe=.42, MSe=.31)。したがって、クラスタ1はアニミズム高群、2は中群、3は低群とみなすことができる。

Table2 クラスタ別アニミズム尺度下位因子得点の分散分析結果

下位因子 (従属変数)	下位因子の平均値(SD)			F値	p値
	CL1(n=88)	CL2(n=102)	CL3(n=44)		
自然物の神格化	4.05(.05)	3.01(.05)	1.50(.08)	$F(2, 231)=392.73$	$p < .001$
所有者の分身化	3.81(.62)	2.95(.61)	2.17(.76)	$F(2, 231)=100.90$	$p < .001$
所有物の擬人化	3.36(.60)	2.47(.50)	1.80(.59)	$F(2, 231)=128.40$	$p < .001$

次にこれらクラスタを独立変数、ホーディング傾向尺度の各下位因子の下位尺度得点を従属変数として一要因の分散分析を行ったところ、「物質多量因子」以外は有意差がみられた(Table3参照)。よって、アニミズム的思考の強い人はホーディング傾向も強いことが確かめられ、仮説は支持された。

Table3 クラスタ別ホーディング下位因子得点の分散分析結果

下位因子 (従属変数)	下位因子の平均値(SD)			F値	p値	Tukeyの多重比較 $\alpha=.05$
	CL1(n=88)	CL2(n=102)	CL3(n=44)			
物質多量因子	2.56(1.19)	2.56(.97)	2.50(1.05)	$F(2, 231)=.06$	n.s.	MSe=1.15 CL1=CL2=CL3
処分回避因子	3.29(.82)	3.04(.95)	2.99(.92)	$F(2, 231)=2.93$	$p < .05$	MSe=.79 CL1>CL3
拡張自己因子	2.30(.86)	1.97(.78)	1.77(.75)	$F(2, 231)=7.31$	$p < .001$	MSe=.65 CL1>CL2>CL3
対物責任因子	3.01(.78)	2.67(.90)	2.60(.87)	$F(2, 231)=5.90$	$p < .01$	MSe=.59 CL1>CL3
対物管理因子	3.56(.08)	3.32(1.12)	3.26(.08)	$F(2, 231)=3.73$	$p < .05$	MSe=.62 CL1>CL3
記憶補助因子	2.59(.78)	2.56(.84)	2.32(.72)	$F(2, 231)=3.34$	$p < .05$	MSe=.34 CL1>CL3

また、両者の関係性をより詳細に検討するために、下位概念間で相関分析を行った結果、ホーディング傾向にはアニミズム尺度の中でも特に「所有者の分身化」と「所有物の擬人化」が強く関連していることが認められた。

### (3) 心理的・社会的諸問題の検討

①**「ホーディングに因る諸問題」の項目群の因子分析結果**：予備調査を経て抽出された「ホーディングに因る諸問題」9項目を用いて因子分析を行った(最尤法、プロマックス回転)。その結果、因子数および各因子に属する項目群は、「精神的問題」「経済的問題」「社会的問題」の3因子からなることが見出された。主な項目例としては、順に「モノが多くて憂鬱になることがある」、「モノを購入しすぎて財政難に陥ったことがある」、「持ちモノの多さが原因で、家族や友人などと揉め事をおこしたことがある」等があげられる。

各因子の尺度項目得点は、順に  $M=2.46$  ( $SD=1.25$ )、 $M=1.74$  ( $SD=.88$ )、 $M=2.06$  ( $SD=1.07$ )となり、かなり低い値であった。これは、「モノの溜め込み自体がない」という人を含んでいたことに一因があるといえる。そこで、以下の分析においては、「溜め込みがある」と答えた310名のみを対象とする。

②**ホーディング傾向とホーディングに因る諸問題との関連性の検討**：ここでは両尺度間の関係性を検討するために、各因子の尺度項目得点を用いて共分散構造分析(パス解析モデル)を実施した。まずホーディング傾向の下位尺度6変数、ホーディングに因る諸問題の下位尺度3変数の全てを投入した初期モデルを検討したが、その際「物質多量因子」を媒介する形で初期モデルを作成した。その理由は、ホーディング傾向尺度の残りの5因子は、モノに対する態度の感情的側面や認知的側面を測定しているのに対し、「物質多量因子」のみ行動的側面や物理的問題を測定しており、そこに因果関係が仮定されるからである。よって、ホーディング傾向(物質多量因子を除く)→物質多量因子→ホーディングに因る諸問題の初期モデルを検討したところ、データとモデル全体の適合度はあまり良く

なかったため、個々のパス係数や修正指数に基づき、モデルの改善を試みた。その結果、最終的に Figure1 に示すモデルが得られた。主な適合度指標は、GFI=.994, AGFI=.968, RMSEA=.028, AIC=52.20,  $\chi^2(5)=6.20, p=.287, n=310$  となり、修正モデルはデータに適合するよう適切な改善がなされたといえる。本結果より、ホーディングに因る諸問題に関しても下位概念間で階層構造が認められる可能性が示された。

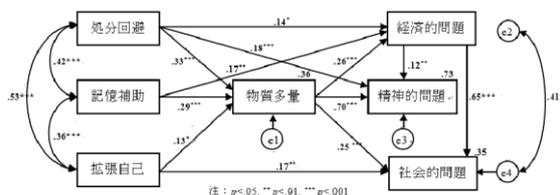


Figure1 ホーディング傾向尺度とホーディングに因る諸問題の因果モデル (修正モデル:標準化解)

#### (4) 本研究の貢献と今後の課題

本研究全体を通しての貢献としては、まず日常的なホーディングに陥りやすい人の、モノに対する態度特性を測る「ホーディング傾向尺度」を作成したことが挙げられる。本尺度は、下位尺度を想定していることや、多面的な態度特性から測定しているため、既存尺度に対する問題点（尺度の一次元性や項目の偏り等）は解消されたといえる。

また、社会心理学や消費者行動研究の領域において、新たな研究視点をもたらした点も一つの貢献といえる。本研究では、モノへの主観的な意味づけがホーディング傾向につながることを示唆されたが、こうした人とモノとの関係性に着目したことは、社会心理学における「対物関係」研究の発展に少なからず寄与するものと期待できる。また、消費者行動研究の領域においても、これまでほぼ等閑視されてきた所有や廃棄の課題について、新たな研究視点をもたらしたといえる。

さらに、既存研究では結果として生じる問題のみが注目されてきたが、本研究では、モノに対する過剰な意味づけや執着がホーディング状態をもたらし、それが精神的な問題や経済的な問題、ひいては対人関係に軋轢を生じるといった社会的問題を引き起こす様相が確認された。こうしたモノに対する態度特性と諸問題との関連性が示されたことにより、日常のモノに対する接し方を通して将来起こり得る事態を事前に予測でき、問題を未然に防ぐことが可能になる。

しかし、本研究には大きな問題点があることも否めない。それは、溜め込みの有無や困惑度を、あくまで主観的な自己申告によって測定している点である。これらを正確に検討するには、今後は主観的な指標に加え、客観的な測定が可能な指標を用いる必要があるといえる。

さらに本研究では、あくまで日常レベルのホーディングを取り上げたが、この日常レベルの延長線上に病的なホーディングがある

のか否かも検討の余地がある。ホーディングはこれまで OCD の一症状として取り上げられていたが、そもそもホーディング傾向のある人が何らかの“きっかけ”を基に病的なホーダーへと進行するのか、あるいは日常レベルのホーダーと病的なホーダーは根本的に独立した関係にあるのかについては、ホーディング傾向尺度の適用範囲を限定するためにも、今後検討すべき重要な課題といえる。

#### <引用文献>

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders, Fifth edition*. Va: American Psychiatric Association. (日本精神神経学会 (2014). *DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル* 医学書院)
- Edwards, E. A. (1993). Development of a new scale for measuring compulsive buying behavior. *Financial Counseling and Planning*, *4*, 67-84.
- Frost, R. O. & Gross, R. C. (1993). The hoarding of possessions. *Behaviour Research and Therapy*, *31*, 367-381.
- Frost, R. O., Hartl, T. L., Christian, R., & Williams, N. (1995). The value of possessions in compulsive hoarding: Patterns of use and attachment. *Behaviour Research and Therapy*, *33*, 897-902.
- Frost, R. O., Kim, H.-J., Morris, C., Bloss, C., Murray-Close, M., & Steketee, G. (1998). Hoarding, compulsive buying and reasons for saving. *Behaviour Research and Therapy*, *36*, 657-664.
- Frost, R. O. & Steketee, G. (2010). *Stuff: Compulsive hoarding and the meaning of things*. Boston, NY: Houghton Mifflin Harcourt. (春日井晶子訳 (2012). *ホーダー: 捨てられない・片づけられない病* 日経ナショナルジオグラフィック社)
- Frost, R.O., Steketee, G., & Grisham, J. (2004). Measurement of compulsive hoarding: Saving Inventory-Revised. *Behaviour Research and Therapy*, *42*, 1163-1182.
- Frost, R., Tolin, D., Steketee, G., Fitch, K., E., & Selbo-Bruns, A. (2009). Excessive acquisition in hoarding. *Journal of Anxiety Disorders*, *23*, 632-639.
- 池内裕美 (2010). 成人のアニミズム的思考: 自発的喪失としてのモノ供養の心理, *社会心理学研究*, *25*, 167-177.
- Kingston, K. (1999). *Clear your clutter with feng shui*. New York: Plakus.
- Neziroglu, F., Bublick, J., & Yaryura-Tobias, A. J. (2004). *Overcoming compulsive hoarding: Why you save & how you can stop*. Oakland: New Harbinger publications.
- Steketee, G., Frost, R., & Kim, H. (2001). Hoarding by elderly people. *Health & Social*

Work, 26, 176-184.

- ⑬ Steketee, G., Frost, R. O., & Kyrios, M. (2003). Cognitive aspects of compulsive hoarding. *Cognitive Therapy and Research*, 27, 463-479.
- ⑭ Warren, L. W. & Ostrom, J. C. (1988). Pack rats: World class savers. *Psychology Today*, 22, 58-62.

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 池内裕美、藤原武弘、感情労働としての苦情対応が精神的健康に及ぼす影響：主観的ストレスと職務満足感に焦点を当てて、関西学院大学社会学部紀要、査読無、120号、2015、89-102  
[http://www.kwansei.ac.jp/s\\_sociology/attached/0000079835.PDF](http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attached/0000079835.PDF)
- ② 池内裕美、人はなぜモノを溜め込むのか：ホーディング傾向尺度の作成とアニミズムとの関連性の検討、社会心理学研究、査読有、30巻、2014、86-98  
DOI : 10.14966/jssp.30.2\_86
- ③ 池内裕美、苦情行動者の心理：消費者がモンスターと化する瞬間、繊維製品消費科学研究、査読無、54号、2013、21-27

[学会発表] (計 13 件)

- ① 池内裕美、アニミズムがホーディング傾向に及ぼす影響：日米比較の観点から、日本社会心理学会第 56 回大会、2015 年 10 月 31 日、東京女子大学 (東京都・杉並区)
- ② 池内裕美、人はなぜモノを溜め込むのか 3: 喪失体験とホーディングとの関連性の検討、日本グループ・ダイナミクス学会第 62 回大会、2015 年 10 月 12 日、奈良大学 (奈良県・奈良市)
- ③ 池内裕美、モノの死を悼む心：モノ供養にみるアニミズム的世界観、日本心理学会第 73 回大会、2015 年 9 月 23 日、名古屋国際会議場 (愛知県・名古屋市)
- ④ Hiroimi Ikeuchi, Psychology of Hoarding: From the Viewpoint of Animistic Thinking, The 11th Conference of Asian Association of Social psychology, 2015 年 8 月 20 日、Cebu City (Philippines)
- ⑤ 池内裕美、人はなぜモノを溜め込むのか：ホーディングの実態と心理的背景、学術講演会、2015 年 1 月 7 日、神戸学院大学 (兵庫県・明石市)
- ⑥ 池内裕美、コレクターか、ホーダーか：収集行為と溜め込み行為における心理的相違点、日本グループ・ダイナミクス学会第 61 回大会、2014 年 9 月 6 日、東洋大学 (東京都・文京区)
- ⑦ 池内裕美、溜め込み行為は何をもたらすのか：ホーディングによる心理・社会的諸問題 日本社会心理学会第 55 回大会、

2014 年 7 月 27 日、北海道大学 (北海道・札幌市)

- ⑧ 池内裕美、人はなぜモノを溜め込むのか：ホーディングの実態と心理的背景、学術講演会、2014 年 7 月 2 日、奈良大学 (奈良県・奈良市)
- ⑨ 池内裕美、ゴミか、タカラか：ホーディング (溜め込み) の実態と心理的背景、KSP (関西社会心理学研究会) 第 411 回大会、2014 年 5 月 24 日、関西学院大学大阪梅田キャンパス (大阪府・大阪市)
- ⑩ 池内裕美、人はなぜモノを溜め込むのか：ホーディングの実態と心理的背景、S 研 (社会心理学研究会)、2014 年 3 月 15 日、筑波大学東京キャンパス (東京都・文京区)
- ⑪ 池内裕美、人はなぜモノを溜め込むのか 2：ホーディング傾向尺度の再検討、日本社会心理学会第 54 回大会、2013 年 11 月 3 日、沖縄国際大学 (沖縄県・宜野湾市)
- ⑫ 池内裕美、ゴミか、タカラか：モノに支配される人々の病理、日本社会心理学会第 54 回大会 (“消費の病理を問い直す：望まざる消費行動の心理的メカニズムを探る”企画&話題提供)、2013 年 11 月 2 日、沖縄国際大学 (沖縄県・宜野湾市)
- ⑬ 池内裕美、人はなぜモノを溜め込むのか：アニミズム的思考がホーディングに及ぼす影響、日本社会心理学会第 53 回大会、2012 年 11 月 17 日、つくば国際会議場 (茨城県・つくば市)

[図書] (計 2 件)

- ① 水野由多加、妹尾俊之、早川貴、中田邦博、伊吹勇亮、山川雅哲、難波功士、池内裕美、守如子、大内秀二郎、山本武利、竹内幸絵、佐藤卓己、陶山計介、後藤こず恵、若林靖永、鈴木謙介、河島伸子、有斐閣、広告コミュニケーション研究ハンドブック、2015 年、422 (118-136)
- ② 谷口淳一、柿本敏克、大沼進、安藤香織、磯友輝子、野波寛、杉浦淳吉、池内裕美、高橋直、山浦一保、安達智子、三浦麻子、ナカニシヤ出版、暮らしの中の社会心理学、2012 年、169 (93-104)

[その他]

- ・メディア対応 (インタビュー)
- ① 池内裕美、「物欲」と上手につき合う、中日新聞朝刊 4 面、2015 年 9 月 5 日号

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

池内 裕美 (IKEUCHI, Hiroimi)  
関西大学・社会学部・教授  
研究者番号：50368198